

安堂は、八九年九月、暴風のため倒壊したので一時山手の聖經女学校講堂を礼拝場にあてていた。このとき名を、横浜美以教会と改称した。一八九九（明治三十二）年四月、広大な会堂を蓬来町一丁目に建設し、献堂式をあげた。

### 日本聖公会

聖安得烈教会 Saint Andrews Church の起源は、一八七四、五年のころ、横浜在住の英国人が主となり成立したものである。居留地百一番地にクライスト・チャーチ Christ Church とよぶ礼拝堂を建設して、牧師として聖公会所属の聖職ガレットを招聘した。この教会堂は外人のためのものであったが、ガレットは、この会堂を日本人の礼拝のためにも提供していた。七九年のころ、ガレットに代わってアービンが牧師に就任した。そうしてこのアービンの時代に、日本人の礼拝堂使用は許されなかったため、日本人は自宅集会をおこなうようになった。そして、東京からの宣教師出張教導をうけていた。また、日本人を妻にしていたクラークというイギリス商人が、日本人のために居留地百五十三番の家を集会所として提供していた。一八八七ごろになって、東京在住の宣教師 A・C・ショウの管理下に入り、日本人伝道者の出張によって、毎日曜日、規則正しく礼拝できるようになった。

このショウ司祭は、一八七三（明治六）年九月 S・P・G（英国聖公会福音宣布協会）最初の派遣宣教師として W・E・ライトとともに来日した。七六年、東京に芝聖アンデレ教会を創立、東京の三田寺町の大松寺、のちに築地居留地に居住し、また日本語を勉強した。七四年四月から福沢諭吉の家に子供たちの家庭教師の資格で同居した。七九（明治十二）年聖教社神学校を設立し、日本聖公会において、日本人教設者が主導権をもつように意を用いた宣教師である。軽井沢を避暑地として開発した宣教師としても知られている。彼の同僚であるライト司祭とともに、横浜教区および中部教区の基礎をすえた人物である。英字新聞ジャパンメールによれば、日本人は彼を、フルベッキ博士・ヘボン博士とともに三聖人とよんでいたという。このショウ司祭のもとで、横浜の信徒は指導をうけていった。

一八八九（明治二十二年）居留地五百十三番から、クラーク氏所有の二百二十九番館の商店に移って、日曜日ごとの礼拝を営んでいたが、九二年クラーク夫人を中心として信徒の協力により、寿町三丁目に小会堂を建設した。そして、日本人伝道者のほかに、東京芝の聖アンデレ伝道団員の宣教師たちが相ついで牧会の任にあたった。

日本聖公会（S・P・G系）が、はじめて府中伝道をおこなったのは、八三年であった。多治見十郎・今井<sup>七</sup>寿道が、府中・本宿・川越に伝道旅行をしたのである。北多摩地方が、今井の属した東京芝の聖アンデレ教会の伝道地域となり、定期的な出張伝道が、今井によりおこなわれるようになったのは、八四（明治十七）年からであった。

今井は、のち日本聖公会の中央的な神学校である聖公会神学院の初代校長として、わが神学教育史上に不朽の名を止めた人物である。文久三年（一八六三）、東京芝茸手町の沼田藩邸内に、医師今井去斎の子として生まれた。一八七六（明治九）年シヨウ師の宅に寄寓し、同師の教育をうけた。七九年、芝聖アンデレ教会の設立と同時に英・漢・数学を教授する聖教社が設立されたので、ここに学んだ。今井は、のち聖教社の教務を担当したが、一方では、シヨウの伝道を助け、実際の伝道を試みたのは八四年からで、二十歳のころであった。八六年秋には、シヨウ師に随行して、相州の伝道地を巡回して大磯に演説会を開いたが、これが同地方の開拓伝道の端緒となった。

そのうちに、北多摩地方は、米国ミッシヨンの伝道地となって、北多摩定住の伝道者となったのは、同ミッシヨンのアメリカ人宣教師ウッドマンとその書記和氣一作であったと思われる。八五年ごろ「ウッドマン司祭が府中町に英語学校を開き、毎週土曜日には聖書講義、日曜日には礼拝と説教」をおこなったという。八五年十二月五日、府中駅三十五番地に設置されていた同ミッシヨンの「府中講義所」で、本宿村の杉田喜太郎（二十六歳）ら四人が、ウッドマンの手で受洗した。以後、八六年に十七名、八七年に十七名と、三年間で約四十名の受洗者が府中講義所によって生まれた。

八七年に講義所は、府中駅から本宿村へ移転している。

八五年、八六年における府中地域の受洗者には、府中駅の人はいなかった。府中地域で最初にキリスト教の洗礼をうけた村人十一人は本宿村であった。そのほか、小平地域に、「小川講義所」（小川村）、立川地域に「立川講義所」が開かれている。

日本聖公会は、一八八七（明治二十）年に組織される。それ以前は、日本で監督教会と称せられたものは英国のC・M・S（英国教会宣教協会）およびS・P・G（英国福音宣布協会）の二会社と米国の監督教会伝道会社が、それぞれ独立の伝道をしていたのである。それを、三社が共同の働きをなし、日本において具体的一致の行動をとる必要が感じられて、日本聖公会の組織となった。

S・P・GのW・B・ライト師は、一八七六（明治九）年、神奈川県の小野村（現在 厚木市）や中津村（現在 愛川町）などの大山周辺農村地帯に宣教し、一八八〇年には中津永生教会を生み出し、飯田栄次郎師を定住させた。また小野の吉沢家との最初の接触を通して、のちの吉沢直江師とその父兄弟の入信に貢献した。七七年には、自ら直接には従事しなかったが、横浜における聖公会宣教活動の重要性に着目、当時、クライスト・チャーチの牧師であったギャラット司祭の日本語礼拝開始に蔭の助力を与え、今日の横浜聖アンデレ教会の種を蒔いた（『あかしびとたち』）。

右に出てきた吉沢直江は、のちに横浜教区の大元老になった司祭である。八五年、東京下谷のメソジスト教会で受洗したが、八六年九月二十六日、東京聖アンデレ教会でピカステス主教から信徒按手おんじゆをうけて聖公会に入った。吉沢家は、代々庄屋を勤めた士分格の家で、直江はその三男である、明治の開国で、この草深い田園にも西欧文化の影響が入り、西洋野菜の栽培が奇縁となって、外人に接し、やがて福音に導かれる。

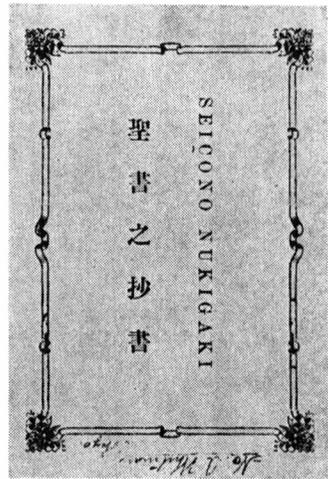
### バプテスト派

バプテスト派によって、事実上の伝道がなされたのは、一八七三（明治六）年二月七日、アメリカバプテスト宣教師同盟から派遣されたN・ブラウン夫妻来日の時をもって、最初とする。ブラウンの来日は、キリシタン禁制の高札が撤去される直前であり、しかも、来日三度目のゴープルをともなって来日した。

米国北部バプテスト大会は明治五年（一八七二年）、自由伝道協会の事業を引き継ぎ、日本に宣教師を派遣することを決議し、ゴープル並びにN・ブラウンの二氏を指名したのである。

ブラウン夫妻、ゴープル夫妻は同年三月二日の日曜日、山手二百三番において、教会組織の式をあげた。それを横浜第一浸礼教会とよんだ。わが国、浸礼（バプテスト）教会の最初である。ブラウンは間もなく牧師になったが、同年七月十三日、彼の筆生であった石川寿一郎に浸礼を授けた。これは日本人最初のバプテスト教会の信者である。

一八七四（明治七）年、ふたたび会堂を山手七十五番の箕輪坂に建てて、ここに移転したが、翌七五年二月六日、火事のため焼失した。この八月夏、会堂は再建された。七六年、長老教会（海岸教会）会員の川勝鉄弥がブラウンにより洗礼をうけた。川勝は、はじめ、バラにつき英語を学んでいるうちに、七四年、長老教会で洗礼をうけた。翌年、N・ブラウンにつき聖書を研究しているうちに、バプテストマ（バプテストマとはキリスト教徒になるために教会が執行する典礼、水を用いて人を清めあるいは新生を与えるまでバプテスト派は浸礼と訳し、全身を水につける。プロテスタントでは一般に洗礼という）は浸礼でなければならないことを悟り、すぐに浸礼をうけて、バプテスト教会に入り、七九年按手礼をうけて牧師となった。ブラウンは、来日早々、聖書の翻訳を始めた。最初は諸教派協同の聖書翻訳委員の一人であったが、訳語に関して意見を異にした。そのため七六年一月委員をやめて、単独でバプテスト訳新約聖書を完成した。七九年八月一日に印刷を完了した。これが、日本語で印刷した最初の新約聖書で、諸派協同翻訳委員会の訳に先んじること足かけ九か月であった。



聖書之抄書

神戸女学院大学図書館蔵

ブラウンは最初の翻訳に満足せず、次々と改正工夫していった。八六年元旦の死にいたるまで、彼は、川勝鉄弥とともに、新訳聖書の第二回訂正をへブル書八章まで完了していた。ブラウンの訳後、遺業を継いだ者は、川勝牧師、A・A・ベネットらであり、へブル書八章以下を改訂して出版した。

ブラウンは、大体、来日以来、横浜山手六十七番に住んでいた。七四年、息子が来日し、同屋敷内に印刷所を設けた。これは、非常に大きな成果をあげ『聖書之抄書』以下が発行されたのである。ブラウン訳は、外人離れのした名訳であるが、それは川勝の力量によるところが大き。ブラウンの理想は、早くから言語の簡易化にあったので、聖書全部を片仮名で出版し、のちローマ字で出版することが、彼の念願であった。

八三(明治十六)年十一月九日、三たび会堂が全焼したとき、自給の策をたて、教会員の寄付金によって再建することになった。新会堂は、ブラウンの死後完成し、八七年二月一日、献堂式が挙行された。ブラウンの後任は七九年に来日して以来伝道に従事していたA・A・ヘンネットである。

この年八七(明治二十)年、横浜第一浸礼教会の名称を改めて、横浜第一バプテスト教会とした。また、やはり同年、ここに、横浜バプテスト神学校が創立された。八九年二月十一日、川勝鉄弥が牧師に就任する式がおこなわれた。九三年まで在職した。

会堂再建のころ、婦人宣教師クララ・A・サンズが来日し、その後、女子小学校を創立し、また、バイブル婦人会を設立、各

所に伝道所を開いた。さらに、川勝牧師就任のころ、少年団体を組織して、聖書を研究し、同志を導くことにつとめたが、三年にわたって、彰栄隊という青年団を形成した。一八九四年十二月二十六日会堂増築のため、箕輪坂（俗称代官坂）の中ほどに移転して、献堂式をおこなった。

また八五年九月には、高座郡上溝に初めて、バプテスト教会が設立された。アメリカ人宣教師N・ブラウンの日本語、ハイブル翻訳を助けた川勝鉄弥が伝道した。その説教を聞いた最初の人は、原町田二丁目籠細工職中山市五郎（三十一歳）で、教会設立のときに受洗した。翌八六年十一月、その妻ハツが受洗した。

#### 日本組合基督教会

横浜における活動は、ようやく明治後半に入っておこなわれた。すなわち、横浜市福富町三丁目八十六番地に、あたらしく基督教講義所が設けられたのは、一八九三年五月五日のことである。猪俣昌武・小林錠之輔・加藤直士・和田垣讓・久保木健雄・船本務・福永熊之助の七人が、東京のアメリカン・ボード・ミッション宣教師D・C・グリーンと協議しておこなったものである。翌九四年五月二十日、講義所所属の信徒および地方の組合教会員で横浜在住信者により、教会が組織され、日本組合教会関東部会の協賛を経て、伝道教会設立式を挙行した。これが日本組合横浜基督教会である。

#### 美普教会派

横浜第一美普教会の起源は、一八八〇（明治十三年）ごろ英国人ミス・H・G・ブリッテンが、米国メソジスト<sup>プロテスタント</sup>基督新教外国伝道協会から派遣されて教育事業をはじめたことにある。八五年、F・C・クライン夫妻が来日し、尾上町六丁目に住居し、夜、英語を教授するかたわら、伝道集会をおこなった。八六年四月には、その近くの住吉町六丁目にあった私立米若学舎で日曜集会を開いた。八七年、米国から、T・H・カルハオ夫妻が来日し伝道に力を尽した。こうして、教会員は百五十名に達したので、八九年に、山下町二百七十一番に会堂を新築した。九七年には教勢大いに振った。

## 基督同信会横浜集会所

基督同信会の伝道は、一八八八（明治二十一年十一月、英国ケンブリッジ大学を卒業したばかりのH・G・ブランドが来日し、翌八九年から始められた。その後、もと横浜海岸教会々員の乗松雅休<sup>やす</sup>が、同教会長老の海軍大軍医榎正身とともに協力して伝道に従事した。九一年、ブランドは、一時帰国し翌九二年八月、再度来日した。右の榎氏の家を譲りうけて、そのころ米国から帰国した丹森太郎<sup>たん</sup>と共同生活し、ここで集会を続けた。そのころの信徒は十人余であったという。

乗松雅休は、松山藩士の下級武士の家の出身である。上京して、勉強したのち、横浜に移って神奈川県属官となった。この横浜で彼が下宿した家の老婦人が、海岸教会の信徒であった。乗松がはじめて教会の門をくぐったのは、八七年一月二日の日曜日であった。そして、牧師稲垣信から洗礼をうけ、その年の秋、伝道者になるため明治学院に入る。この明治学院在学中に同信会のブランドに遭遇し、明治学院を退学し、日本橋教会に派遣されていたがこれを離脱して、同信会の伝道者となったのである。この乗松の行動は、稲垣牧師に大きな衝撃を与えた。

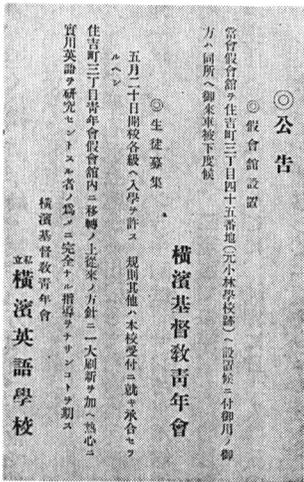
基督同信会（プレマス・ブレズレン）は非組織であって、もっぱら信仰を重んじ、祈禱<sup>きと</sup>と靈感とをもって信仰的生命となし、儀式的信条、形式的規則を排除し、聖書を唯一の教典とし、よくこれを読み、よくこれを宣る徒であるといわれる（山本秀煇『日本基督教会史』による）。ブランドも、組織に属さず、手弁当で来日したのである。ブランドは、一八八九（明治二十二年十月、日本橋本銀町、柳生流柔術道場において、彼らのいうパンさき、すなわち聖餐式<sup>せいさんしき</sup>）を執行し、信徒の群を作ること成功した。そこに集まったのは、乗松ら日本橋教会の青年信徒たちであった。その影響は、海岸教会にもおよび、長老の榎正身が同信会の徒となったのである。これは、教会にとって一大問題であった。

日本橋教会を離脱した乗松は、ただちに旅を住いとする伝道者の生活に入った。彼は一八九〇年を京浜間で過ごしたが、九

一年二月以降、全国を伝道して歩いた。この同信会により大きな打撃をうけた教会は、日本橋教会のほか、大阪島の内教会と、盛岡メソジスト教会がある。

日本におけるYMCAの存在の、もっとも古いものは、横浜の外人居留地の、外国人による The Young Men's Christian Association Yokohama (一八七四(明治七)年十一月二十日に設立されていた。これは、先進英米YMCAの流れをくんでいると思われるが、外国人のものであり、二、三年で絶えてしまったこともあって、現在の横浜YMCAとは直接の関係はない。

横浜YMCAは、一八八四(明治十七)年、海岸教会の青年たちが、小さい集まりとして、はじめたものである。会長は共立女学校教師で海岸教会長老の熊野雄七で、牧師稲垣信が指導にあたった。翌八五年、真砂町三丁目豊国橋通りの柳下平次郎所有の建物で、英語研究会をはじめたが、八七年、フェリス和英女学校教師高根虎松(高松義人)の入会とその援助によって、盛んになった。



横浜基督教青年会の公告  
横浜YMCA蔵

## 二一 カトリックとギリシヤ正教

### 聖ミカエル教会 (Saint Michael Church)

一八七七(明治十)年ごろになると、明治政府のカトリックに対する態度も好意的になり、状況はしだいに好転してきた。七九年には、警察法の緩和によって、居留地外への伝道も有利になった。宣教師は、八王子・横須賀か

ら、遠くは伊豆半島・東海道方面まで布教できるようになった。

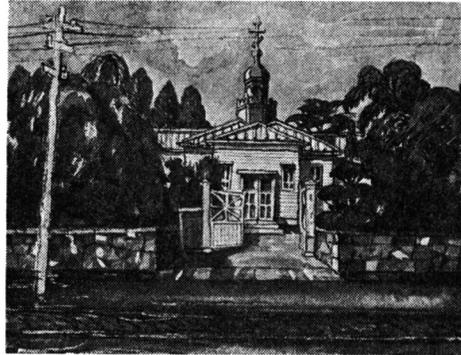
一八八二（明治十五）年のころ、神奈川浅間下に一家屋を借りて説教所を開き、宣教師L・G・テストビイド師が、居留地八十番の聖心教会堂から出張して布教に従事した。八七年になって、野毛町二丁目に借家して、ここに説教所を移した。一八九一年、ル・マーンシャル師は、サンモール修道会のメール・マチルダの献金によって、横浜市内で、もつとも人口稠密な若葉町に土地を購入し、二階建ての洋館を新築した。二階に礼拝所を、一階に小学校（明道小学校）を開き、ル・マーンシャル自身が主任となった。ここに、純粹に日本人信徒のための教会が生まれたのである。一八九四（明治二十七）年、定任宣教師が来任したときに、独立して「聖ミカエル教会」と名づけられた。これと同時に、聖心教会は、まったく外人信者のための教会になった。

ローマカトリック教会の布教は三多摩地方にもおよんだ。八王子在の被差別部落の山上卓樹・山口重兵衛により導入され、横浜聖心聖堂よりテストビイド神父が巡回布教をおこなった。八六年には会堂・天主学校を合わせた「聖瑪利亞教会」が建てられた。その後、この教会の信徒はしだいに増加し、一八九九（明治三十二年）には三百九名をかぞえるにいたった。現在の元八王子教会がそれである（沼謙吉「部落解放運動の先駆け」『歴史評論』一二五号）。

また、現在の本町にあるカトリック八王子教会は一八八九（明治二十二年）、三崎町に建立された天主教会に始まっている。当時の宣教師はビッグル、カリヤック両神父であった。その後九四年十月、現地に移り、教会を再建した。九七年十月、メイルン神父が赴任し、その後、四十年にわたり伝道に従事した。大正末期の信徒は約四百名に及んだ。

### ハリストス降誕教会

一八八四（明治十七）年、東京ハリストス正教会主教ニコライ師の命により、太田町六丁目に講義所を設け、北川伝道師を迎えた。ついで、八六年、小林伝道師が赴任した。この二人の伝道師の布教に



明治初年小田原に設立されたハリストス正教会  
小暮次郎氏のスケッチ

より、信徒三十五名ほどになった。その信徒のなかから選ばれた前田兵郎は、伝道師となって、横浜教会の専任となった。

一八九九（明治二十二年）、講義所を、福富三丁目に移したが、九一年、俗称税関山の金刀比羅堂を購入して、これを講義所とした。このとき、東京から大主教ニコライ師をはじめ教師たちを招聘して盛大な聖成式をあげた。

九三（明治二十六年）、この税関山から再度、太田町に講義所を移した。その後も、数回、講義所を移転したが、平沼町二丁目に新会堂を建設したのは、一九一〇（明治四十三年）年になってからである。

日本ハリストス教会は、一八八〇年に、八王子正教会を建立していた。司祭パウエル佐藤、副伝教師イオシフ萩原、同ステファン近藤が布教に従事し、信徒は六十六名であった。八二年、横山町二丁目九三番地に会堂が建立され、信徒は百二十名に及んだ。その後八八年、八日町に、一九〇五年ごろ、さらに馬乗町に移転し、ついで一九一一年天神町に移転した。大正年間には、八王子ハリストス正教会と称し、信徒は約二百名いたが、その後、戦災に会い消滅した。

## 第四節 学校教育の拡充

### 一 初等教育の展開

#### 教育令下の小学校

国民皆学を目標とした「学制」は、その実施に当たって、まず小学校の設置に力をいれる方針をとったので、全国的にその普及をみた。神奈川県・足柄県、さらに一八七六（明治九）年四月以降の新神奈川県もその例にもれなかった。こうして初等教育は著しい発達をとげたが、その反面、一般民衆にはこれが文部省の強迫政策と受けとられて農民一揆にも「学制」反対の条項が掲げられ、また国家・地方の町村財政にも過大な負担となったことから政府内外からも批判の声があがった。一八七四（明治七年九月以来、大輔として文部省の中心人物であった田中不二麿は、アメリカ風の教育の心酔者で、「学制」の中央集権主義を廃して、一八七九（明治十二年九月、「教育令」の制定を行った。これをうけて同年十月一日、県は「追テ何分之達ニ及候迄総テ是迄ノ通」と達した。「教育令」が実施に移されたのは、翌一八八〇年二月である。「教育令」は、学校の設置や就学義務を著しく緩和し、学校の経営にあたる学務委員も公選とした。委員の職務は、公立・私立の別なく町村の学事を管掌することと定めた。ついで「学事概則」を制定し、学校の設置・統廃合や教則などについて定めている。ここでは公立学校のみ県庁の許可を要するものとし、私立学校は県庁に報告すればよいことになった。

ところで「教育令」は、小学校の修業年限、就学期間、授業日数等について、弾力性ある規定をもちこんでおり、県の学事概則も僅か二十六条にすぎない布達であった。そこで多くの町村や小学校は、官庁の統制が緩和されたと解した。たとえば、